

3月9日 三陸沖の地震

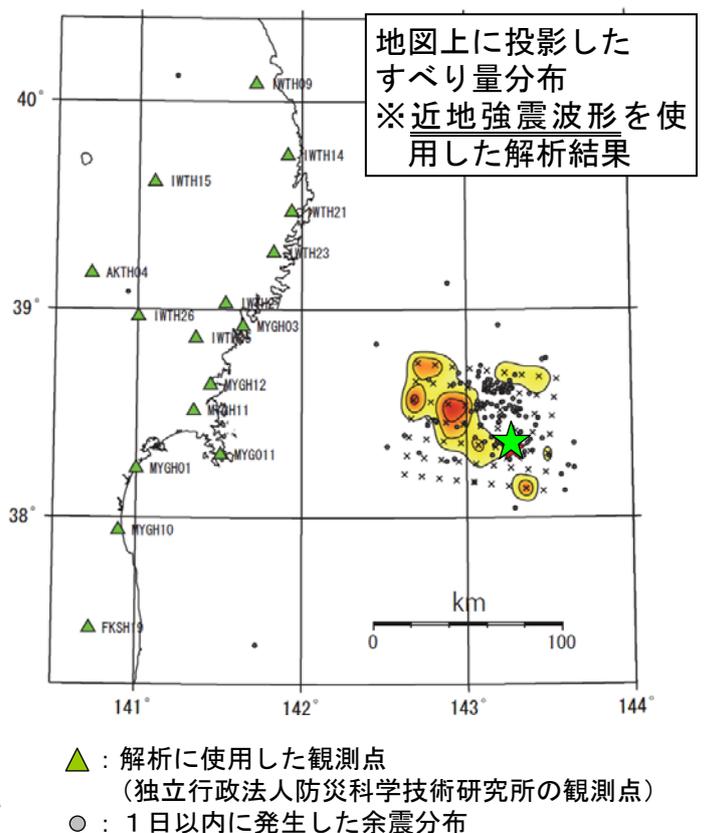
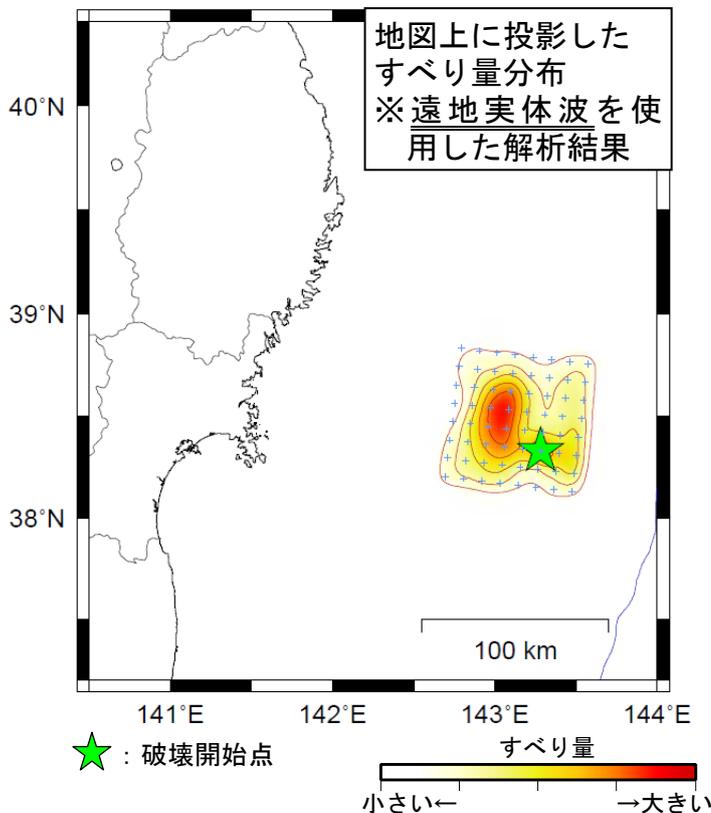
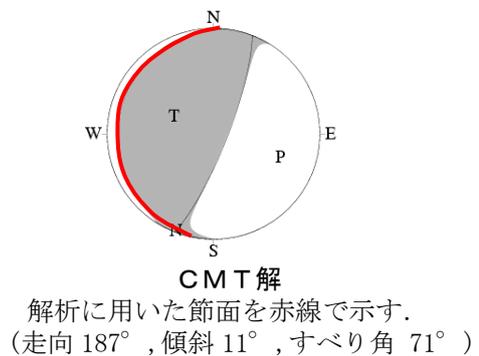
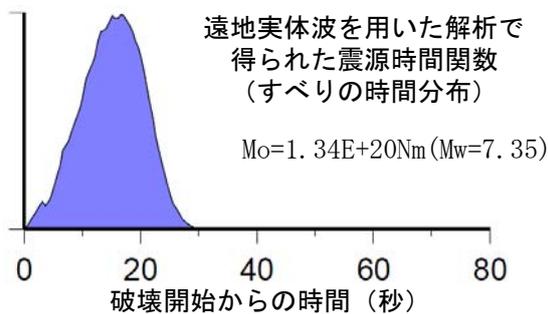
— 遠地実体波および近地強震波形による震源過程解析（暫定） —

2011年3月9日11時45分に三陸沖で発生した地震について、米国地震学連合（IRIS）のデータ管理センター（DMC）より広帯域地震波形記録を取得し、遠地実体波を利用した震源過程解析（注1）を行った。また、独立行政法人防災科学技術研究所のK-net, KIKNETの近地強震波形を用いた震源過程解析を行った。破壊開始点は気象庁による震央の位置（N38° 19.7′, E143° 16.7′）とした。

この地震は太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生したと考え、断層面は気象庁のCMT解の西北西傾斜の節面を用いた。

主な結果は以下のとおり。

- ・ 主なすべりは初期破壊開始点よりも北西側の深い部分にあり、主な破壊継続時間は約30秒間であった。
- ・ 断層の大きさは長さ約60km、幅約50km、最大のすべり量は1m程度であった。
- ・ モーメントマグニチュードは7.3~7.4であった。



(注1) 解析に使用したプログラム

M. Kikuchi and H. Kanamori, Note on Teleseismic Body-Wave Inversion Program, <http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/ETAL/KIKUCHI/>

※ この解析結果は暫定であり、今後更新する可能性がある。